

経済発展への文明的アプローチ…イスラームの視座

ニック・ムスタファア

柳沼正広 訳

※本稿は、2014年6月3日に行われた講演（東洋哲学研究所主催・東京都港区で）の翻訳です。

講師は、マレーシア・イスラーム理解研究所 (Institut Kefahaman Islam Malaysia = IKIM) の事務総長です。同研究所は「ムスリムならびに非ムスリムの人々に対してイスラームへの理解を促進する」ことを目指して活動しています。

序

現代文明の苦境は、批判的思考を持ちつつ、神の導きの存在を信じる者にとって驚きではない。実際、この問題に有効な唯一の選択肢は、神による社会秩序の形成に同意することである。アッラーは、イスラームを通して人類の社会秩序形成のための指針を与えてきた。この指針は、時代や場所が変わることによって廃れるようなものではない。不運なことに、ムスリムた

ちも含めて人類はイスラームの道から離れて迷っている。世俗化による脱イスラーム化の過程は、包括的で動的なイスラームの理解からムスリムたちを遠ざけている。今日のムスリムたちは、単純化されたイスラームの世界観に心を奪われてしまい、イスラーム的なアプローチが、いかに包括的であり、いかに現在の世界に関連しているかを論じることができないでいる。ムスリムたちは、イスラームとは何であるかについて、そして初期のムスリム共同体の実践について説明することは明らかに夢中である。これらの欠点は、基本的にクルアーンとハディース【訳注：預言者ムハンマドの言行録。宗派によってはその他の指導者（イマーム）の言行も含む】

の学についての包括的な理解が、ムスリムの知識人や学者たちに欠けていることに原因がある。

クルアーンとハディースの学は、知識のあらゆる側面を貫いている。事実、聖なるクルアーンとハディースの学を理解するためには、アラビア語やクルアーンの啓示の歴史的背景に通じることに加えて、政治的、社会学的、経済学的、科学的な視座を身につけなければ

ならない。このように、理論的なレベルにおいても、究極的には現実においても、イスラームが現代世界の複雑な状況における人間社会の秩序に対して、どのようなイスラーム的アプローチを提案できるのか、その展望を提供することが、真剣で批判的な思考を持つムスリムの責務なのである。

経済のシステム化についての

イスラームの世界観

イスラームでは、人間の生活は一つであり分割できないものと考ええる。またイスラームは、イスラームの企図にもとづく社会秩序の中で互いに求め合い、補完し合う個人の生活を、社会の生活のうちの切り離すことのできない一部であると考える。人間は、個人的な存在であり同時に集団的な存在なのである。預言者は、その二重性を次のように述べている、「信じる者たちは、相互の愛と関心において一つの体のようであり、もしその一部分が苦しみを訴えるならば、他の諸部分が互いを呼び合って助けに来て、痛みと不眠を分かち合う」

(ブハーリーの『真正集』)。

社会秩序を司るイスラーム法(シャリーア)は、人間の社会の秩序を維持するための社会統治のシステムであり、理想の生活にたどり着くために歩むべき正しい道を示している。またシャリーアは調和のある正しく動的な仕方、個人的責任と社会的責任をアッラーへと向かう社会の方向性にもとづいて定義する。

イスラームは、特定の明確な目的をもって啓示される。18世紀の偉大なムスリムの学者シャール・ワリーウツラーの言葉に、イスラームの目的は、人間の内面生活を浄化することと秩序ある社会を築いて神の意思を実現することであり、その中で人は潜在的な力を十分に開発することができる⁽¹⁾、とある。イスラームは宗教と国家の統一を強調する。そして今あるイスラームの理想は、実践の中で果たされうる。イスラームの権威を高めるため、国家はその宗教的信念に関わらず、あらゆる人に対する社会的正義を追求しなければならぬ。イブン・タミーヤは、社会的正義が支配する者と支配される者(al-tarwa al-taiya)との溝を架橋し、究極

的には、そのことによって社会の諸条件も改善していくとの見方を示している⁽²⁾。

真実・正義・同胞愛についてのイスラームの価値観は、現代の人間社会を再編することによって再確認されなければならない。今採用されるべき政策や社会機構は、イスラーム国家の伝統的な実践のそのままの模倣ではありえない。むしろ、それらの政策や機構は、シャリーアの精神とその命じるところの枠組みの中で、現在の社会経済的な状況に合わせる必要がある。

聖なるクルアーンは、全人類は一つであると宣言し、個人も社会を必要とし、社会も個人を必要とする有機的な一つの存在に人類をたとえている。それぞれはお互いにとって不可欠なのである。この統一的な見方は、人間活動のあらゆる領域に動的な方向性を与える。

アッラーは、人間の社交性は人間の自然的性向の中に埋め込まれていると私たちに教えている。聖なるクルアーンは述べている。「人びとよ、われは一人の男と一人の女からあなたがたを創り、種族と部族に分けた。これはあなたがたを、互いに知り合うようにさせるた



講演に先立って、マイクを持ち、あいさつするニック・ムスタファ氏

めである。アッラーの御許で最も貴い者は、あなたごたの中最も主を畏れる者である。本当にアッラーは、全知にして凡ゆることに通曉なされる」(クルアーン49:13、日本ムスリム協会訳)。

この節は、人間がさまざまな民族的・部族的な集団を形成して現れるように創造されたのは、基本的に相互認識のためであることを教えている。この諸民族・諸部族への割り当てを通して、社会の生活にとって不可分の条件である相互認識が起ころのである。アッラーはまた、肉体的、精神的、知的、感情的な点について多様な能力や可能性を人間に付与した。アッラーは、ある人々をある面において優れるように創造し、他の人々を他の面で優れるように創造した。それはすべての人がお互いを必要とするためである。このことは、社会の中の相互結合と相互依存の基礎を意味している。ムスリムの哲学者であり歴史家であるアブ・アリー・アフメド・ミスカワイヒは、『個人的性格の精髄』の中で、人間は生まれながら社会的 (madani) であるという理論を展開している。⁽³⁾ 人間は、自身の本性をその

中で完成させることができるような組織化された正しい社会を必要とすることをこの理論は主張している。人間は人々と交わり、人々と悲しみや喜びを分かち合うことを通してのみ自らの敬虔さを深めることができるとミスカワイヒは信じていた。徳の質は、他者と協働しながら生きることによって集団の中で向上させていくことができるのである。

また、偉大な学者であるファーラービー⁽⁴⁾は、どの人間も自己を保ち自己の最高の完成を果たすためには、本性上、自分では自分自身に与えることのできない多くのものを必要としているのであり、どの人間も自分が必要とする何かしらを満たしてくれる他の人々を必要としているのである、と信じている。この点において、人間はだれしも自分自身がだれに対しても同じ関係にあることを見いだすのである。

このように人間は、多くの人々と協働して互いの特殊な必要を満たし合っていくことなしに、生まれついで自分の性質を本来の形で完成させることはできない。共同体全体の貢献の結果、すべての個々人が生き

延び、自身を完成させるために必要とするものが結び合わされるのである。

クルアーンに説かれる主題は人間であり、人間がいかにして幸福を実現できるかである。そしてクルアーンには、生涯の中で人間が歩むべき諸段階が書きとめられている。イスラームにおいては、人間は純粹で、最高の形で創造され、天使よりも高い地位を与えられているとされており、この時間と空間の中で絶対性を実現し、この地上において神の意思を実行するという宇宙的意義を持つ責務を託されている。

イスラームの観点では、他の被造物はすべて人間に従うためにつくられているとする。太陽、星、月、地球、雲、空気、植物、その他の要素も、この目的のため、人間のためにつくられている。⁽⁶⁾人間は、個人的・集団的完成の達成を可能にするすべての資源を自由に利用することができる。この目的に向かって、人間はそれらを適切にまた効果的に用いて、ものごとの道筋を変化させ、アッラーが命じ、示したような型へと創造を変容していかなければならない。このことが、地上に

おけるアッラーの代理者 (Khalifah) としての人間に置かれた神の信頼 (amanah) なのである。

地上における人間の特別な位置は、人間に与えられた推論し分析する知性の力に対応している。さらに、人間は、正しい道を人間に示す預言者の使命を通してアッラーからの導きを受け止める。このように、人間は、神のしもべ (Ebed) であると同時に地上における神の代理者にすぎない。人間は自分で地球を支配しているのではなく、神の代理者として、すべての被造物を支配しているのである。ゆえに、人間は創造された秩序について神を前にして責任を担っているのであり、アッラーの被造物に向けられた恩寵の通路なのである。生命を相互に結びついた同質の全体とみるイスラームの統一的な見方と、生命を別個の断片の込み入った機械とみなす世俗的な見方は、明らかに相反している。イスラームの世界観は、人間に与えられた道徳的・精神的な力を涵養することを要求する。人間の精神性の深化は、決然として勇氣のある、また正義感にあふれた慈悲深い人格の発展を実現することを目指している。

このような使命の成功のためには、イスラームが全的に実行されうる環境が必要となるだろう。

経済次元の位置

イスラームは、すべてを包含する生き方として、人間存在のあらゆる面を規定する。またイスラームは、神、人類、神に対する人間の関係、宇宙における人間の位置と役割、人間の人間に対する関係など、相互に関連する概念の網の目に基礎を置く秩序を探索する。

経済的な次元は、イスラーム社会の中で特別な位置を与えられている。イスラームは、全体の安定性は人間の物質的な満足と精神的な満足の両方にかかっていると信じている。非イスラームシステムの物質的支配とは反対に、イスラームは両者を人間のすべての行動と要求を結ぶ形で統合されたものと見なす。

人間存在のこの両面に対するイスラームの関心は、ムスリムたちを禁欲主義から遠ざける。ムスリムたちは、彼らの経済的な探求において、活動的、創造的そして生産的であることを求められる。イスラームにお

いては、敬虔と生産性の中に積極的な相関関係が存在する。この地上の生活での積極的な社会的相互作用を明快に認める見方は、人間に明確な社会経済的な義務を与え、その実行は人間の精神性を決定づける。事実、イスラームは、人間の物質的要求を精神的な関心の優位のもとに隷属させるよりも、物質的な追求を精神性と融合させることを好んできた。⁽⁷⁾

イスラームの社会秩序の基本原理は正義の確立である、とイスラームのはじまりから絶え間なく繰り返して語られてきた。経済における正義は、多くの目標の達成を意味している。絶対的貧困の根絶は、最優先課題の一つである。どの個人も、自身と自身に頼る者たちの必要を満たす仕事に参加し貢献しなければならない。つまり、経済的な機会は、すべての個人が参加できるものでなければならぬ。個人が創造的で想像力を発揮することを求められるところでは、社会も集団として支えとなることが求められる。経済的な正義は、個人の富をより多くの経済活動を作り出す循環へと送り出されるべき所と見なす。経済の機会と経済活動の

創出は、個人が社会に貢献する手段を提供するとき、道徳的な行為となり、社会正義にかなったものとなる。秩序ある社会は、手段——ここでは富——が社会全体の善に対する正しき視座によって位置づけられるとき実現されるのである。

経済的正義とはまた、経済的潜在力がいかなるときにも可能な限り活用されることを意味する。アッラーによって、すべてのものが人間のために十分に創造されているのだから、人間には精神的な発展と両立する経済の改善を継続して探求することが求められる。ひとたび一人の人間の経済的が必要が満たされ改善されたならば、その人間性は、創造的、知的、道徳的道筋に不可避的に導かれるであろう。なぜなら人間は物質的な満足を身体的燃料とする考える機械であるから。

一つの国の中で利用できる経済資源は、有効に組織立てて用いられるべきである。その経済は、利用できる資源を、特定の国の優先事項や経済的現実に合わせて、また必要であれば、その国の外のウンマ【訳注…宗教に立脚した共同体】の危急の必要に応じて用いられるべき

である。利用できる資源の浪費や不適切な使用は、経済的不正 (dā'im) である。同様に、資源についての認識・調整・利用における経済的非効率も、経済的不正に加担するものとなる。

経済的正義は、個人の決定が主導権を持つと考えられる環境の中で確保される。宗教的原理に導かれた経済的努力に参加・決定する自由は、経済的正義にとって不可欠の前提である。このように、倫理と経済活動の統合は、個人の自由と調和する、イスラームの卓越したアプローチなのである。(集団的権威としての) 政府は、一般的な指針を示し、不健全な実践を規制して、社会の必要に応じた自由な経済発展を可能にしなければならぬ。政府の参加は、相補的生産への要求が高い地域で期待されるだろう。

聖なるクルアーンは、生活の経済的・物質的側面を大いに強調している。富についての考えは、慈善 (khaṭīr)、神の寛大さ (fadl Allāh)、神から与えられる日々の糧 (rizq) など、積極的な意味で表現されている。それは、しばしば人間に対する最も明白な神の恵みと考

えられる。富の生産と創出に従事するムスリムは、事実、アッラー崇拜すなわちイバダという根本的な行に従事しているのである。

シャー・ワリーウッラーは、社会的・政治的秩序における経済的諸要因の重要性を指摘している。⁽⁸⁾ 彼は、経済的正義が社会的・政治的秩序にとって不可欠であることを強調する。この偉大な学者が、人間と地上における人間の経験を経済的な問題や衝動のみから分析しているという意味に解釈するべきではなく、むしろ、彼はすべての価値を人間の道徳的・精神的必要に従属させ、経済的要因に、人間の諸問題における適切な場所を与えようとしていると理解するべきである。

イスラームの経済システムは、経済的正義の実現と、個人間の経済的協働が生まれる環境の創出を目指す。存在を俗なるものと聖なるものとに区別することを拒むことによって、イスラームは、すべての人間の努力と活動を、精神的かつ理性的な吟味に晒す。個人と集団の経済活動における精神性の深化と道徳性の涵養は、経済的な正義と協働を確実に促進するだろう。このア

ブローチが経済活動にもたらす最終的な結果は、経済の効率性・生産性・成長・安定性に永続的な貢献を生み出していくであろう。

イスラームモデルの理論的枠組み

経済の組織化のための理論的枠組みを規定する多くの原理が、聖なるクルアーンとハディースから導き出される。経済システムに対する哲学的・倫理的なアプローチは、システムを組織立て運営していくための世界観・指針・精神を与える。

イスラームの世界観の中心にあるのは、アッラーと人間の関係 (al-tawhid) 【訳注：タウヒード。神が唯一であること信じ、それを表明すること】である。人間自身の仲間である人間や自然に対する人間の関係は、アッラーによつて定められた価値観と調和するものでなければならぬ。タウヒードは、すべての信者を結びつけて、アッラーの意思に委ねられる一つの統合された有機体にする。すべてのものはその存在において、生においても死においてもアッラーによつてそれぞれに割り当

てられた目的を実現する。すべての被造物は相互に依存しており、創造の全体は、部分と部分の間に存在する完全な調和によつて進む。聖なるクルアーンにおいて、アッラーは述べている、「本当にわれは凡ての事物を、きちんと計つて創造した」(クルアーン54:49、日本ムスリム協会訳)。

倫理的な文脈では、タウヒードは、人間存在の精神的な面と世俗的な面の統合にあたる。倫理はタウヒードの核心である。聖なるクルアーンは繰り返し次の句を用いている。「信仰して善行に勤しむ者たち」(クルアーン2:25日本ムスリム協会訳)。

この二つの属性のうち、前者は明らかに後者にとつて不可欠の前提であり、しかし同等に前者は後者なくしては無意味なものとなる。イスラームのアプローチは、経済の問題を、法によるよりも、道徳的な教えを通して解決しようとする。

タウヒードは、たんに目標であるだけでなく、経済にとつて大きな妥当性を持つ動的な過程へと導く。またタウヒードは、この章のはじめで論じたように、ア

ツラーの意思を体现する正しく公平な経済秩序の創出をもたらず。アツラーは全能の創造者として、創造の階層におけるあらゆるものの適切な位置を知っていて、それぞれを適切な状況下におく。⁽⁹⁾正義とは、被造物のある者たちに必然的に「懲罰」をもたらずものであるが、これは、創造における人間に与えられた中心的地位が、人間に、ある仕方で宇宙の均衡や人間の規範的状态を覆すことを許しているという事実の結果である。⁽¹⁰⁾

聖なるクルアーンは多くの節の中で、アツラーと世界の間には神によって築かれた均衡を変化させる自由意志と力が、人間だけに与えられていることを示している。イスラームの視点から見れば、現代の世界が経験している自然と社会の均衡の崩壊は、すなわち人間とアツラーの間の均衡の崩壊である。事実、人間がそのために創造されたところの信頼（クルアーン2:30）を担うことを拒むことによって、人間は、人間としての責任を放棄し、獣性の中に墮ちた。アツラーとの平和の無い世界の平和など根拠のない概念である。

経済システムへのタウヒードの原理の適用は、人間

を経済運営の中心課題として位置づける。イスラームの視点では、人間は、自然を社会の必要と自身のために利用する過程において、自然をそれなしには倫理的な功績も過失も不可能となる不可欠な材料とみなしている⁽¹¹⁾と見る。イスラームは、人間の目的のために、現代の技術が行っているような自然の濫用を人間に許していないし、資源を汚染したり減少させたりすることも許していない。人間による自然の利用は責任あるものでなければならぬ。責任とは、自然をわずかでも破壊したり劣化させたりしてはならないことであり、神の目的の実現や人間による最も高い道徳的価値の實行に資することのない仕方⁽¹²⁾で自然を利用しないことである。これは、将来世代が用いるものを減らしてはならないことも意味する。自然の破壊は、創造全体の総合的な目的に反するであろう。

イスラームは、神と人間の関係・道徳性・社会正義にもとづく社会を築くことを目指している。これらの神的な価値から導き出される原理は、本来的に包括的かつ多面的であり、あらゆる時と場所の経済システム

に適用することができる。それらの諸価値の実行は、経済的正義を確かなものとし、究極的には経済単位間のそれぞれの努力の協働を促進するであろう。聖なるクルアーンに見られる『*Yi'a'rahu*』【訳注：知人のために】「善行を為すときには互いに協働せよ」、あるいは『*Ma'arufu*』【訳注：友誼／親睦】は、ひとたび経済的正義が達成されれば、実践できるのである。

社会秩序における経済活動の体系化に対するイスラームのアプローチは、個人や集団の経済的前進の機会をもたらすだけでなく、それらの前進を悲惨な人間の分裂や混乱をもたらすことなく維持する。イスラームの多面的で時間を超越したアプローチは、多くの社会問題を生み出すような、人間の能力や必要の一面的な促進を防ぐ。イスラームは、人類が全体として前進すべきことを教え、広めるのである。

目 標

イスラームは、目的志向である。個人と集団のレベルでの経済活動の組織化を導く原理は、イスラームの

社会秩序の総合的な諸目的に照らし合わせて、特定の経済目標を達成することを目指す。これらの諸目標は次のように大まかに分類することができる。

①どの個人にも経済活動に参加する十分で等しい機会を創出し供給すること

個人の経済活動への参加は、宗教的・社会的責任の一つである。個人はすくなくとも自身の生活を支え、自身を頼る者たちの必要を満たすことを求められている。個人は、創造的で自律的な動機を持たなければならぬ。個人は、同時にムスリムは、可能な限りもつともすばらしいやり方で自分の責任を果たさなければならぬ。効率的で生産的であることは、有徳の行為である。すべての創造は人間だけのためにあるのだから、天然資源の宗教的責任に合った利用能力はムスリムたちに強く求められる。

集団的レベルにおいて、システムは、すべての個人に十分で等しい参加の機会を創出し供給できなければならぬ。参加の精神は、調和的で協働的でなければならぬ。あらゆる種類の誤った実践は縮小されて、

究極的には取り除かれなければならない。イスラームは、経済的協働が成功の鍵であると信じる。効率の良さと経済的前進は、すべての個人が調和のもとに働くことができる環境においてこそ達成され維持される。このようにシステムは、あらゆる種類の経済事業がその精神を考慮することを要求する。このことは、システムの中の経済活動を規制するあらゆる仕組みにも当てはまる。このアプローチは、すべての個人を経済生活の中で活動するように励まし、そこから脱落することを思いとどまらせるのである。

採用される技術の類も、この目標に一致していなければならぬ。技術の発展は、経済機会の創出を妨げるものであってはならない。技術は、経済の卓越と前進のための一つの手段なのである。それが人間の参加と創造性にとって代わったり、またそれらを阻害したりするようなことがあってはならない。

②絶対的貧困を根絶し、社会の中のですべての個人の基本的必要を満たすこと

貧困は、経済的な病であるだけでなく、個人の精神

性にも影響する。イスラームは、貧困との戦いを優先する。貧困を取り除くためのイスラームのアプローチは、すべての有能な個人を経済活動に活発に参加するように動機づけ手助けすることである。だれもが自分の自発性を通して成功しなければならない。関係する個人によってあらゆる機会が探求されるとき、社会と公的機関は援助するだろう。イスラームは、問題を短期的な、たとえば金銭を貧しい人に手渡すような手段で解決することは奨励しない。そのかわり、個人が積極的に経済活動に参加することを通して自立することの重要性を説く。短期的な手段は能力を奪われている人たちには適切である。しかし、障がいをもつ人たちも働くように励まされる。イスラームは、働くことをイバードート（神への奉仕）の一部とみなしている。

イスラーム的経済システムの中の社会や権威には、すべての個人の基本的必要が満たされることを保証する責任がある。これらの要求が満たされなければ、経済の生産性と効率性は達成されないであろう。全人口の基本的必要を満たすことは、持続的な経済の安定と

成長の不可欠な前提なのである。

③経済の安定と成長を維持し、経済的な福利を向上させること

イスラームは、人間の経済的立場を静的なものとは見なさない。アッラーは、すべてのものは、人間が使用するために十分に創造されていることを保証している。人間の経済的な福利を改善するという考えは、宗教的な命題である。人間の努力についてのイスラームの企図には、精神的な側面と物質的な側面の統合があるゆえに、イスラームによって熱望される経済の前進は人間の精神的改善にも貢献するものとなるだろう。イスラームの枠組みにおける経済の安定は、十分な雇用と価格の安定を意味する。これらの目標は両方とも、経済的正義の領域のものである。これらの目標の達成は経済成長に有意義に貢献し、究極的には経済的福利を向上させるだろう。

自然と制度整備

経済的正義と協働は、イスラーム経済学の精神であ

り、タウヒードの命じるところでもあるゆえに、必要とされる制度整備の形は、この精神を現実に移しかえていく方向に働き、さらにはどの地域や時代の必要にも応えるものでなければならぬ。

このような制度整備には、いくつかの要素が貢献する。それらには次のようなものがある。

①イスラームは、そのはじめから経済運営における政府の位置を認めていた。組織立った社会においては、経済を監督・調整して進むべき方向を示す権威が存在しなければならぬ。政府には、不変の基礎を持つシヤリーアに定められている通りに、一定の支出を試みることが求められる。たとえば行政機能・法と秩序・防衛・イスラームの普及などを維持することは、政府に自前の収入を生み出して経済に影響を与えられるようになることを求める。

さらに、現在のより複雑な経済環境においては、ある一定の公共の必要は、経済活動の順調な進展を確実にする仕事に政府が参加することを要請している。この原理は、シヤリーアから導き出すことができ、特定

の時と場所の必要に関連づけることができる。通貨の供給と配分の金融運営や公共財の生産への参加のほか、数多くの例が挙げられる。

② 私的な部門は、社会の経済活動の中で、もっとも強い自発性を持つものと考えられている。個人の自発性と創造性は、イスラームの企図する経済組織の中で高く位置づけられる。諸個人は、シャリーアの要求する範囲内で、自身が選択する経済活動について所有し、決定することを恒久的に認められている。経済への個人の参加についてのイスラームのアプローチは、経済システムの中に打ち立てられた宗教的価値観のうちに、個人の意思と意欲を通して生み出される。イスラームは、人間本性が自身の進路を描けるように導く特別な権利と能力を重んじるゆえに、強制される法的手段は最小限のものとなる。私的部門と向き合う政府の役割は、個人がその時の社会全体に利益をもたらす活動ができるように個人の所有権を保護し、経済全体についての全般的な指導と情報を供給することだけである。基本的に政府の参加は、私的部門の自発性を補完する

ものである。イスラームのアプローチは、経済活動のための個人の戦略を大幅に許している。

③ イスラームは、国際通商の重要性を認識している。イスラームでは、いかなる貿易障壁も原則として反対されているし、今後もそうあるべきである。もし貿易障壁が必要な場合も、過去にあったように、相互的協定の形で用いられるべきである。この領域では宗教的な神聖さを犠牲にするような開放性は選択肢とならない。貿易のあり方を含むあらゆる経済的帝国主義は終焉させるべきであろう。全人類のための普遍的宗教であるイスラームは、イスラーム的な経済がその他の人類に示すようなあり方へと、国際間の通商も直接至ることができるとの確信を抱いている。

政策の策定——システムの運用化

政府によって採用される経済政策は経済の進展に影響を持つ。実行されるべき政策は、システムのタウヒードの精神を考慮しなければならぬ。この精神を政策に反映させれば、経済の前進に資する環境をさら

に強化することになるだろう。シッディイーキーは、政策策定が必要な領域への政府のアプローチに関する研究に有意義な貢献をしている。彼はイスラーム国家の機能を大まかに三つの範疇に分けている。⁽¹³⁾

①不変の基礎をもつシャリーアによって割り当てられた機能

この範疇は、聖なるクルアーンとハディースによって直接的にも間接的にも特定される機能であり、法学者によって確認される。これらの機能は人間の恒常的な状況に関するものであり、社会の条件によって変わるものではない。明白な例は、ザカート【訳注…喜捨。一年を通じて所有された財産に対して一定率の支払いが課される宗教的義務行為】である。

②現在の状況のための独立した推論 (Ijtihad) にもとづくシャリーアに由来する機能

この範疇は、私たちの時代の社会経済状況を考慮しながらシャリーアの諸目的を実現する必要があることと、類比的な推論 (Qiyas)、あるいは公益 (masalih) にもとづく議論によって、聖なるクルアーン

とハディースから引き出されるものである。明白な例は、環境の保護である。

③どのような時代や地域でも、協議 (Shura) の過程を通じて人々によって政府に割り当てられる機能

この範疇は、どの時代や地域に暮らす人々であっても、公益にもつとも資するものは何かという基準にもとづいて、イスラーム国家の公的権威に割り当てたいと願うような機能を含むであろう。

これらの政策策定に関する指針は、経済問題への政府の参加に明確な方向性を与えるだろう。このアプローチは、政府の政策が実動的で動的であることを要求する。第一の機能は、あらゆる時代のすべての社会の基礎であり、あらゆる種類の社会にとって不可欠であると考えられる。第二そして第三の機能は、イスラームのアプローチが経済運営における政府と私的部門の密接な関係をどれほど強調しているかを示している。

イスラームは、アッラーに対する人間の関係 (タウヒード) が、経済を含む文明のすべての側面において人類に

価値観と基準をもたらずと信じている。このように、達成されるべき諸目標や社会的制度や組織そして政策が、導入され実施されるためには、それらすべてが、イスラームの哲学的・倫理的な基盤にもとづいていなければならぬ。現代のムスリム学者への挑戦は大きい。彼らは、聖なるクルアーンとハディースの学を修めるだけでなく今日の経済問題を把握しなければならぬ。そのようなやり方を通してのみ、我々の現実の環境に即したイスラームを前提とする経済の原理が形成されるのである。

結び

経済システムの体系化についてのイスラーム的世界観は、これまでも、また今も、人類文明全体へのアプローチである。現代の複雑な経済に取り組むことには実際的な価値がある。ここまで訴えてきたように、イスラームモデルの理論的枠組みは人間の本性を反映している。それは、経済的な問題を人間の必要の全体から切り離されたものとして見ることを拒み、それらを適切な視

座の中に位置づけることを訴える。倫理と経済そして個人の責任と集団の責任に対するイスラームの聖と俗とを統一した多面的なアプローチは、動的かつ進歩的であり、強い妥当性を持つものである。

タウヒードのパラダイムは、システムを導く精神を詳しく説いている。経済的正義と協働は、あらゆる人間の経済システムの確実でしかも持続的な成功のための不可欠な前提として働く基礎なのである。神の命令に由来する経済的正義と協働は、あいまいな観念ではない。それらは、いかなる時期や時代においても妥当するはつきりした明々白々の言葉なのである。イスラームは、システムを築き上げるためのたんなる理論的・道徳的な指針を提示するだけではなく、それらを実行するための十分な方法論も提示する。預言者（彼に平和あれ）は、人間の道徳教育をたいへんに重んじていた。イスラームの経済システムは、目的の正当性と同様に手段の正当性を強調する。その明確な倫理的考察の基盤は、イスラーム的社会秩序の枠組み全体の中にあってこそ意味を持つことができる。

イスラーム的パラダイムへの関心が刷新されるならば、人類の福祉についての世俗的な考え方について誠実に思索し、究極的にはそれを変えようとする真剣で批判的な思考を持つ知性たちに、現代における大きな機会が訪れるであろう。人間は、創造者アッラーとの関係なしに正しく生き抜くことはできない。その関係の断絶は、人間に災害をもたらす。過去の文明が証明したように、現代の人間もまたこの真実を証明することになるだろう。このようにイスラーム的社会秩序は、人類にとって絶対に必要なものである。

原注

- (1) Khalid Ahmad Nizami, "Shah Waliullah of Delhi: His Thought and Contribution," *Islamic Culture*, LIV, 3 (July 1980), 145.
- (2) Majid Kadduri, *The Islamic Conception of Justice* (Baltimore: The John Hopkins University Press, 1984), 180.
- (3) Badruddin Bhat, "Miskawayh on Society and Government," *Islamic Studies*, XXIV, 1 (1985), 29.
- (4) Abu Nasir Al-Farabi, *Al-Farabi on the Perfect State*, Trans. by Richard Walzer (Oxford: Clarendon Press, 1985), 229.

- (5) Ismail R. al-Faruqi, "The Nation State and Social Order in the Perspective of Islam," *Dialogue of the Abrahamic Faiths*, 29 (Virginia: The IIII, 1986), 59.
- (6) クルアーンにはこの点について強調している聖句がたくさんある。例えば以下の箇所である。13:2, 22:36, 37, 22:65, 29:61, 31:29, 36:16, 38:18, 45:12
- (7) クルアーンの2:198ならびに62:10を参照のこと。
- (8) Nizami, op. cit.
- (9) William C. Chittick, "Islam and the Loss of Equilibrium," *The Islamic Quarterly*, XXX, 3 (1986), 168.
- (10) *Ibid.*
- (11) Ismail R. al-Faruqi, "Islam and the Theory of Nature," *The Islamic Quarterly*, XXVI, 1 (1982), 25.
- (12) *Ibid.*, 26.
- (13) M. M. Siddiqi, "Public Expenditure in an Islamic State," 6-10 (1987年7月にクアラ Lumpur で開催された International Seminar on Islamic Economics の発表された論考)

* 翻訳にあたってはおもに次の文献を参照した。

『岩波 イスラーム辞典』、大塚和夫・小杉泰・小松久
 男・東長靖・羽田正・山内昌之編集、岩波書店、2002年。

The Encyclopedia of Islam New Edition, edited by P. J.

Bearman, Th. Blanguis, C. E. Bosworth, E. van Donzel and
W. P. Heinrichs, assisted by C. Ott, Brill, 2009.

Hans Wehr, *A Dictionary of Modern Written Arabic*, edited
by J. Milton Cowan, 4th edition, considerably enlarged and
amended by the author, Spoken Language Services, 1994.

／(Nik Mousipha Haji Nik Hassan

マレーシア・イスラーム理解研究所事務総長)

(訳・やぎぬま まなひろ／東洋哲学研究所研究員)